



★2022年1月～3月の予定★

【事務所関係者】

アンマン勤務

(JICAヨルダン事務所内)

宮原 千絵 所長(ヨルダン事務所所長兼務)

柳 竜也 次長(ヨルダン事務所次長兼務)

今村 誠 職員(ヨルダン事務所兼務)

洲鎌 かおり 職員(ヨルダン事務所兼務)

高島 淳 企画調査員

岩井 隆志 企画調査員

林 芽衣 企画調査員

【公休日】

1月2日 三が日

1月3日 三が日

3月21日 春分の日

「アハバール・カシオン」

～名前由来について～

「アハバール」とはNewsを意味するアラビア語。「カシオン」とはダマスカスの北に位置する旧約聖書にも記されている山の名前です。

◇アハバール・カシオンのバックナンバーは以下URLよりご覧いただけます。
<https://www.jica.go.jp/syria/office/others/newsletter.html>

●事務所から

2011年4月28日以降の関係者国外退避に伴い、JICAシリア事務所は現在JICAヨルダン事務所内に日本人所員執務所を設けています。

本号では、下記活動をご紹介します。

●事業報告：「シリア平和への架け橋・人材育成プログラム」 第5バッチ募集・選考終了

★旅行記：「アラビア語元留学生が見た！中東1989年夏」

★離着任挨拶：岩井企画調査員、宮越企画調査員、高井企画調査員

★ダマスカスの風景

●事業報告

「シリア平和への架け橋・人材育成プログラム」第5バッチ募集・選考終了

ヨルダンとレバノン在住のシリア人難民を対象とした「シリア平和への架け橋・人材育成プログラム(JISR: Japanese Initiative for the future of Syrian Refugees)」は第5バッチまでの募集・選考を終了し、合格した研修員と帯同家族全員が2021年11月に日本に到着し、無事研修を開始しました。

振り返れば、2016年にJISRが始まって今日まで、世界もレバノンも激動の中にあり、祖国から避難してきたシリア人難民にとっては更なる試練となりました。レバノンは、2019年10月17日前と後があるとされ、この日から大きな転換期に入ります。2021年5月、世界銀行がレバノンは19世紀以降に全世界で発生した最も厳しい経済危機のトップ3に入るほどであると報告しています。

UNHCRの統計によればレバノンに居住するシリア人難民は2015年ピーク時に100万人を超え、レバノン人4人にシリア人難民1人の割合と言われ、ホスト国としてインフラ、教育施設、その他様々な方面での負担は計り知れません。

そして、2019年10月17日、ベイルートで大規模な反政府抗議デモが発生し、全国に拡大して主要道路封鎖が続く、政治、経済、治安において悪化の一途をたどります。第4バッチ募集説明会と2020年1月

の英語・数学試験で直接影響を受けました。同年3月、新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るい始めた頃、レバノン臨時政府はデフォルトを発表して財政破綻が表面化、同年8月4日には追い打ちをかけるようにベイルート港大爆発が発生しました。

2021年1月、第5バッチ応募書類提出締切りは、新型コロナウイルス対策として外出制限を敷く厳格なロックダウンと抗議活動による道路封鎖と重なりました。その後、英語・数学試験と面接はオンラインで実施となりましたが、財政破綻のため政府が燃料を調達できず、国営電力会社からの送電は一日多くて数時間、インターネット環境も不安定な日々が続きました。この状況下で、数々の段階をクリアして合格した研修員の自ら状況を切り開こうという強い意志に感服しました。

JISR応募者を含むシリア人難民若年層には、兵役を逃れて来た若年者が多くいます。「いつの日か自分が人を殺すことになる、その選択は僕にはなかった。」私はこの言葉をJISR研修員から直接聞き、胸を衝かれる思いでした。

一日も早く穏やかな日が来ること、そしてJISR研修員の活躍を心から祈念します。

(JDSレバノン 元JISRプログラムコーディネーター
内山明子)

「アラビア語元留学生が見た！中東1989年夏」

少し昔話をしたいと思います。私は小さい頃から世界史が大好きで、特にテレビで吉村作治先生が出演されていた古代エジプト特集番組や色々な書物(古代ピラミッドの謎！みたいなもの)を通じて、いつか中東に行ってみたいという気持ちを強く持つようになりました。大学受験の際、「あの美しい文字を読み書きできるようにになりたい！」という一心でアラビア語学科を受検し、大学4年では1年休学、エジプトに遊学しました。ですので、初めての海外旅行も、海外暮らしもエジプト、という少し変わった日本人になりました(1980年代の話です)。

エジプト遊学が終わり日本に戻る際、卒論の準備のためレバントに存在するモスクを見て回り、最後にアテネから日本を目指そう、と、若気の至りで思いつき、勢いで実行しました(この旅の前にトルコとイラン、スペインのモスクを見て回りました)。時は1989年の夏、中東は今よりも随分長閑でした。

1. ヨルダン

まずは飛行機でカイロからアンマンに飛び、アンマン市内を観光。その後、当時はまだ本当に秘境中の秘境だったペトラを訪問しました。

アンマンから早朝出発のJETTバスに乗り、屋前にペトラ遺跡の前に到着。現在は、1日券50JD(約8,100円 2022年1月レート)する入場料ですが、当時は入場料というものは無く、馬を連れた現地の人たちがシークの入り口に数人いて、中の宝物殿まで1JD(約160円 2022年1月レート)だった記憶があります。

当時既にペトラを舞台とした映画インディージョーンズ/最後の聖戦は公開済みで、シークを通過して宝物殿が目の前に迫ったときは本当に感動したのを覚えています。ちなみに現在ペトラ及びその近郊には、ホテルが沢山ありますが、当時は殆ど無く、そのため日帰りをせざるを得ませんでした。今となっては、見所の

多いペトラをアンマンから日帰りで観光するなんて信じられませんか。

それから30年以上の月日を経て、自分がペトラ観光開発*1)に關与しているというのは本当に奇遇だと思います。この時のヨルダン訪問の印象がとても良く、JICAに入構後もヨルダン勤務を希望し、念願叶って、なんと2度も実現することになりました！

2. パレスチナ・イスラエル

当時、パレスチナは「ヨルダン川西岸地区」と呼ばれていて、ヨルダン政府も自国領土と見做していました。ヨルダン側から見れば「国境」は存在せず、イスラエルに行くのは内務省から許可証を取得する必要があるのみでした。私もその許可証を携え、「西岸」に行きました。国境では「出国税は必要なのか？」と何度も聞いてしまい、係官から「国境じゃないからいらなんだよ」と諭されたのは懐かしい思い出です。

今は「国境」であるヨルダン川に、日本のODAにより2000年に建設した立派なキングフセイン橋*2)が架かっていますが、当時は鉄製のトラス橋という構造の仮設の橋で、1車線の片側通行、また橋の床は木製という心許ないものでした。JICAが支援した橋をその後業務で何十回も渡ることになりますが、今もキングフセイン橋から以前のトラス橋の残がいを見ることができます。

イスラエル側に入ると今と同じく徴兵された若い兵士がいて、今と違ってにこやかな出迎えの後、カメラを持っている人は天井に向かって1枚写真を撮る、ということをしていました。その理由は不明ですが、当時は、危険物確認のため、という都市伝説が美しやかに囁かれていました。

備考：*1:「ペトラにおける観光開発マスタープラン策定プロジェクト」

<https://www.jica.go.jp/oda/project/1903794/index.html>

*2:「キングフセイン橋架け替え計画」

<https://www.jica.go.jp/oda/project/9906200/index.html>

イスラエルでは旧市街(当時はアルアクサー・モスクや岩のドームの中まで普通に入れました)や死海観光を楽しみ(衝撃のプカプカ体験！)、卒論に必要な情報や写真を撮影し、数日後ヨルダンに戻ろうとすると、移動に関する情報が殆んど無く、それまでにつこり対応してくれていたイスラエル観光局の人も急に顔をこわばらせ「知らない、情報は無い」「東エルサレムに行って勝手に探せ」という感じでした。

東エルサレムに行くと、すぐパレスチナの人達が親切に教えてくれたおかげで翌日早朝には乗り合いタクシーに乗り、またアレンビー橋(キングフセイン橋のイスラエル側の呼び方)を渡ってアンマンのバスターミナルに戻ってくることができました。こういう手順は、当時渡航者が少ないため「地球の歩き方」にも記載が無く、アラビア語が話せることが役立ちました。ちなみに復路の「国境」通過も往路同様に大変スムーズでした。

3. シリア

いよいよシリアです！

アンマンのバスターミナルに到着するとちょうどダマスカス行きのバスが発車するところで、急いで飛び乗りました。ヨルダンからシリア入国は特に問題もなく(逆は非常に難しい時代でした)シリア国境を越えてから、バスの窓から広がる広大な大地に目を奪われ続けるうちに夕方にダマスカスに到着。一日でイスラエル・パレスチナ→ヨルダン→シリアと移動できたのは当時ならではのかもしれない。

ダマスカスでは旅の大きな目的であったウマイヤドモスク(次頁写真①②)を訪問しましたが、その美しさに目を奪われ、イスラム教の空間の取り方、横に広がる祈りの方向性等に改めて感心しました。

所謂「地中海型」のモスクで、イスタンブールのモスク(多くが教会をモスク仕様にしたもの)やイスファハンのモスク(中央アジア型で青いタイルが綺麗)とは違い、私の中では一番「伝統的」な造りと感じています(筆者個人の感想です)。今のウマイヤドモスクがどうなっているのか、再訪できる日を心待ちにしています。

その後パルミラを經由してアレppoに入り、今では絶対に考えられませんが、そこから陸路でトルコに入る旅程を確認し、旅を続けました。パルミラ(写真③)は当時あまり観光地化されておらず観光客も多くは見かけませんでした。折しも時は6月、灼熱の太陽の下、徒歩での観光のため、あまり多くを覚えていません。遠くに見える丘の上にそびえるお城まで行きたかったものの、徒歩では無理でした(学生だったのでガイドを雇うお金がありませんでした。))。

地中海地域には多くのローマ都市遺跡が残っており、その造りがどこも似てい

るな、と感じたことと、その中でも美しい往時の様子を綺麗に残していると感じました。夕方に真っ赤な夕日に照らされた遺跡の風景は、今も脳に残っていますが、破壊されてしまったのが残念でなりません。今となってはもっとじっくりと見ておくべきだったという後悔が残るばかりです。

アレppoは、足早に通過したのみではあるものの、城壁の外にあるスーク(写真④)が昔の面影を強く残していた思い出があります。

4. トルコ、ギリシャ

その後トルコに入り、主にトルコの地中海側の都市を巡りながら、所々で特徴的なモスクを見て回りました。それぞれのモスクが建設された時代背景とそれが映し出すモスクの形態等を調査して回りました。アレppoから、アダナ、メルシン、アンタルヤ、デニズリ、ボドルム、ブルサ等を回ってイスタンブールを經由し、ギリシャ国境のエディルネを通過してギリ

シャに入りました。トルコに入るところには所持金が大分減ってきており、かなり急ぎ足の旅になりました。

最後のギリシャでは、南アフリカから来た女性とずっと一緒に旅をし、その後数年も交流があったのですが、残念ながら連絡が途切れてしまいました。また、旅の途中では日本人バックパッカーの方々にも多く出会いました。不思議なことに当時中東を旅している学生は圧倒的に関西の大学生が多く、関東の学生は稀でした(ちなみに私は関西人です)。また、この旅に限らず、どんな旅でも旅の途中ではいつでもどこでもとても親切な人が現れ、困っている私を助けてくれました。私も女性の一人旅だったのであまり現地の人と仲良くなりすぎることはしませんでした。そんな若い当時の思い出が、今の仕事にも繋がっているな、と感じる毎日です。

長くなりましたが、最後まで読んでいただきありがとうございます。

(シリア事務所長 宮原千絵)



● 着任挨拶

アハラン・ワ・サハラン！ようこそ！

<p>企画調査員 氏名：岩井 隆志</p>	<p>高井さんの後任として、2021年10月24日にアンマンへ到着、着任しました岩井と申します。2017年から2年間、協力隊員（ペトラ：環境教育）として過ごしたヨルダンへ戻る機会をいただき、とても嬉しく思っています。</p> <p>他方、2011年のアラブの春以降、10年という年月が過ぎましたが、シリア復興への道のりは未だに遥か彼方に霞んで見えます。それどころか、新型コロナウイルス感染症拡大や水不足の影響により、状況は一層深刻さを増していると感じる次第です。微力ながら出来ることに全力で取り組みたいと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。</p> <p>まずは錆びつきつつあるアラビア語のメンテナンスから・・・。</p>
---------------------------	---

● 離任挨拶

マアッサラーメ！お疲れ様でした！

<p>企画調査員 氏名：宮越 麻衣子</p>	<p>2019年10月の赴任以降、世界中が困難な状況にある中で、各自の最善を尽くし一つ一つの課題に日々ひたむきに取り組む方々と共に働かせていただきました。そのような方々と出逢うことが出来たことは、大変ありがたい経験であったと感じます。また、現地で生活・活動する方々からも、自分たち自身の生活に不自由が多い中で、使命を全うすることを決して諦めない姿に多くのことを学ばせて頂きました。</p> <p>自分自身に関しては、目の前の仕事に必死に取り組むことで精一杯な日々でした。とにもかくにも体調管理を大切に、視野が狭くならないように心掛けましたが、事務所の皆様にはご迷惑をおかけしてしまった部分が多くあったと思います。過去2年間担当させていただいた業務に対する後悔の念が無いといえば嘘となってしまいます。ですが、将来シリアと日本の協力が実現した暁には、それらの業務の結果から得られた知見が協力を推進していく礎の一つとなってくれと信じ、新たな目標に臨んでゆきたいと思えます。</p> <p>お世話になった皆様、本当にありがとうございました。</p>
<p>企画調査員 氏名：高井 史代</p>	<p>初めての中東赴任とコロナ禍で、戸惑うことも多かったですが、業務を通じて、またアラビア語やアラブ料理を学んだり、ヨルダンの数多くの遺跡を訪問したりする過程で、この地域を持つ長く複雑な歴史や魅力的な文化、人柄に触れることができ、とても貴重な体験をさせていただきました。赴任して直ぐ読んだレポートに、この地域に必要なものは”Constructive Ambiguity”であるという指摘がありました。2年を経て、何となくこの筆者の謂わんとしていることが分かるような気もします。近年、レバノンでの政治混乱や爆発事故の影響を受けて、シリア経済も日々悪化していく現状には、とても心が痛みました。我々ができることは残念ながら非常に限られていますが、今後も志ある皆さんの活動を陰ながら応援していけたらと思います。お世話になりました。ありがとうございました。</p>

ダマスカスの風景

ダマスカス旧市街の2021年12月の様子をお伝えします。

左：Bab Sharqi、中央：Bab Touma、
右：Souk Al Bzourieh

（撮影：シリア事務所現地職員）



ホームページ
www.jica.go.jp/syria/index.html

お問い合わせ先 (E-mail)
sr_oso_rep@jica.go.jp

お知らせ

アハバール・カシオンへのご寄稿、ご感想およびお問い合わせは、メールで受け付けています。

編集後記

レバノンでの事業並びに所長の夏の中東記と現在真冬のシリアの様子をお届けしました。ダマスカスでは今年2度も積雪があり、例年になく寒い冬となっております。春の日差しが待ち遠しい今日この頃です。(洲鎌)